

◇海幸・山幸彦にまつわる伝説

①〔内之浦港〕（鹿児島県肝付町）、火火出見は海神宮からの帰途、この港に入ったという。

〔青島神社の冬祭〕（宮崎市青島）、火火出見が海神宮から青島に帰還すると、待ちわびていた村人たちは、服を着る暇も惜しんで裸で出迎えたという。この故事にちなみ、かつては旧暦十二月一七日の夜半から夜にかけて、近住の男女が素っ裸になって参拝していた。

〔潮嶽（うしおたけ）神社〕（宮崎県日南市）、火スセリ命（海幸彦）を主祭神として祀る唯一の神社。山幸彦に敗れた火照は、満潮時に船でたどり着いたこの地に宮居を定めたと伝わる。②〔勿体（もったい）の森〕（鹿児島県串間市）、海神宮から戻った火火出見が、南方に巡行する際にご利用した宮跡とされる。

〔串間（くしま）神社〕（宮崎県串間市）、山幸彦は猪・雉などの多いこの地で、狩に興じたと言う。その際、在郷の人々は獲物を追い込むため、櫛の歯のごとく柵をめぐらせて囲ったことで、櫛間（串間）の地名が生まれたという。

③〔石体（しゃくたい）神社〕（鹿児島県霧島市）、火火出見が高千穂宮を置いた正殿の跡に、建てられたという。

〔鹿児島神宮〕（霧島市）、祭神は、穂穂出見尊と豊玉姫命。社伝によると神武天皇の御世に、穂穂出見の宮殿があった高千穂宮跡で祭祀が始まったと伝わる。北西十三^キには、穂穂出見の高屋山陵がある。

〔高屋山陵〕（霧島市）、明治政府が火火出見の陵墓に指定し、宮内庁に管理されている。霧島山麓の杉林の中に鎮まる楕円形の円墳で、表面は多数の石で覆われているとのことだ。

④〔鰐塚山〕（宮崎市）、山幸彦を海神宮から日向に送り届けたワニ族集団が、この山に眠っていると伝わる。

◇神武天皇（磐余彦）にまつわる伝説

①「狭野（さの）」（宮崎県都城市、高原町）、鶴戸で誕生したウ草葺不合は、海神の娘・玉依姫（豊玉彦の実娘）と結婚して狭野に移り住んだ。二人の間に生まれた狭野命（磐余彦、神日本磐余彦天皇、神武天皇）は、狭野神社（高原町）に主祭神として祀られている。

「皇子原、皇子峡・皇子谷、皇子港」、狭野神社西に広がる皇子原も、高千穂峰に登る途中の景勝地、皇子峡・皇子谷も狭野命の遊び場だった。時には、山頂の火山湖（御池）に船を浮かべて遊ぶこともあったという。その船着場は、皇子港と呼ばれている。

「先達神社、駒宮神社」、日南市近郊には、磐余彦にまつわる伝説が多い。彼と吾平津姫を祀る先達神社は、愛馬・お雪の伝説を伝え、平山の駒宮神社も愛馬・龍石を祭神としている。

②「諸県舞（もろがたまい）」（宮崎県高原町）、狭野神社や霧島東神社では、古式の夜神楽舞が奉納されている。この舞は諸県舞と呼ばれ、大嘗祭で演じられてきた。日向隼人と呼ばれる諸県隼人は、薩摩隼人とともに東征に従軍し、大和に都が移った後も、宮殿警護を受け持ったという。

③「鹿児島神宮の石体宮」（鹿児島県霧島市）、鹿児島神宮は、「当宮の石体宮こそ、八幡信仰の発祥地」と主張して一步も譲らない。その石体宮は、磐余彦が東征計画を練った所とされ、彼にちなむ巨石を御神体として祀る。

鹿児島神宮の祭神は、磐余彦の祖父に当たる穂穂出見尊と豊玉姫命。社伝によると神武天皇御世に、穂穂出見の宮殿があった高千穂宮跡で祭祀が始まったと伝わる。

④「宮崎神宮」（宮崎市）、神武天皇が高千穂宮をおいた所。その孫の建磐竜が筑紫の鎮守となつた時、神武天皇を祀ったことに始まるという。

「皇宮屋（こぐや）」（宮崎市）、宮崎神宮西の皇宮神社の地。磐余彦の宮居跡とされる。

⑤「匠ヶ河原（たくみがこら）」（宮崎県日向市）、美々津の耳川左岸にある地名。東征軍の軍船をつくるため、多くの船大工が働いた所とされる。

「立磐（たていわ）神社」（日向市）、磐余彦が東征の船出に際して、航海の安全と戦勝を祈願した所とされる。境内には、磐余彦が腰をかけて休んだという腰掛け磐がある。

「秋風をあげる行事」（日向市）、東征軍が美々津を出航する際、天候や風向きを測るために風をあげたという。出航日にあたる旧暦八月一日にちなみ、秋風を揚げる行事が今も続く。

「起きよ祭」（日向市）、旧暦八月一日に行われる「起きよ祭り」は、東征軍が早暁に出航するため、各戸を巡って「起きよ。起きよ。お立ちだ」と呼び歩いたことに由来するという。

「都農（つの）神社」（宮崎県都農市）、磐余彦が国土平定と戦勝を祈願したことに始まるという。

「船つなぎ石」（大分県佐賀関町若御子鼻の岩、大分市津守碇山の大岩）、磐余彦が船をつなぎ止めた岩という。その当時、碇山の近くまで海だったという。

⑥「神武天皇社」（福岡県北九州市）、磐余彦が岡田宮をおいた跡地に、明治時代になって神社がつくられた。

⑦「高島神社」（岡山県笠岡市）、笠岡諸島の高島に鎮座して、神武天皇を祀る。高島の最高部（標高七七^八）には、花崗山が風化した巨岩や人工的に配置した磐座が点在しており、神武天皇にまつわる伝説が数多く残る。島の頂上に、高島行宮遺址碑が建つ。

「高島神社」（岡山市南区）、児島湾に浮かぶ高島の南端に鎮座して、神武天皇を祀る。その地に神武天皇の高島宮があったと伝わる。

「高島神社」（岡山駅東の高島）、神社の鎮座地が神武天皇の高島宮址とされ、吉備高島宮址碑が建つ。

⑧「安仁（あに）神社」（岡山市東区）、祭神は、神武天皇の兄、五瀬命・稲氷命・御毛沼命。岡山

藩の祈願文では、天照大神。古くは安仁神社東南の鶴山山頂に鎮座していた。今、そこには綱掛石神社がある。社殿近辺には、大岩や東征軍が軍船のとも綱をかけたと伝わる綱掛石がある。この石を中心にして列石が環状に並び立つ。往時、神社近くまで児島湾が迫っていたという。

⑨〔保久良（ほくら）神社〕（神戸市東灘区）、六甲山系の金鳥山中腹に鎮座して素戔鳴御魂を牛頭天王として祀り、同時に磐余彦と椎根津彦の伝承も伝える。神社境内には本殿を取り巻くようにして、神成石・三交石と呼ばれる高さ数メートルの巨石がつい最近まで立っていた（阪神大震災で倒壊）。境内から、銅戈・おびただしい弥生式土器・石器が出てきた。調査の結果、巨石は弥生人の磐座と判明した。

⑩〔稻積島〕（和歌山県すさみ町）、すさみ湾に浮かぶ周囲一キロメートルの小島で、東征軍はここで兵糧の稲を積み込んだという。

〔那智の滝〕（和歌山県那智勝浦町）、磐余彦は海上からこの滝が光るのを見て、ここに上陸する決心を固めたと言う。

〔熊野那智大社〕（那智勝浦町）、那智の滝を大己貴命（大穴持）として祭る。東征軍は八咫鳥の先導で大雲・小雲山を越えて十津川をさかのぼり、大和に向かったという。

〔二木島まつり〕（三重県熊野町）、二木島町の室古神社と阿古師神社合同の秋祭り。笛や太鼓を鳴らしながら、二隻の船が競走するのは、東征軍が賊軍を追撃したことに由来するという。

〔玉置神社〕（奈良県十津川村）、東征軍は玉置山を越え、十津川村に入ったという。山上の玉置神社は、崇神天皇時代の創建以来、神武天皇を祭ってきた。十津川村では、八咫鳥の子孫と考える人が多いとのことだ。

◇神功皇后にまつわる伝説

① **〔笠掛けの松〕**（福岡県宮若市四郎松笠松）、皇后が三韓征伐に行く途上でこの地を通り、松の

枝に笠をかけたことが地名の由来と言う。

〔羽白熊鷲〕（はじろくまわし）**退治**（福岡県甘木市秋月）、皇后は甘木の三奈木の若者たちを集めて檜原に砦を築き、秋月に陣取る羽白熊鷲を滅ぼしたと伝わる。

〔老松〕（おいまつ）**神社**（福岡県甘木市檜原）、皇后が羽白熊鷲を攻めるため、この地に陣を築いたという。この老松の木に鎧をかけたことで、この名がついた。境内の高さ二畝余の石は、皇后が背比べした石という。

〔高良〕（こうら）**大社の背くらべ石**（福岡県久留米市）、大社参道口にある一・五畝の石は、皇后が背比べした石という。

〔腰かけ石〕（福岡県糸島市の八幡宮鎮懷石）、皇后が腰をかけた石であるという。

〔鏡神社〕（佐賀県唐津市）、祭神は、神功皇后。神功は松浦山山頂で宝鏡を埋め、戦勝祈願したとされる。

〔あや杉〕（福岡市東区香椎宮門前の老杉）、皇后が三韓征伐から凱旋した折、使用していた剣・鉾・杖を埋めてそこに杉枝をさすと、根付いたという。

② **〔宇美〕**（うみ）**八幡宮**（福岡県宇美市）、皇后が三韓征伐から凱旋して応神を生むことで、宇美と名づけられた。社前の二本の大樟は、皇后に由来する。

③ **〔唐子踊り〕**（岡山県瀬戸内市）、皇后が三韓征伐の帰途、朝鮮から連れ帰った人たちに踊らせたことに始まるという。

④ **〔住吉大社のお田植え神事〕**（大阪市住吉区）、皇后が三韓征伐から凱旋して住吉大社を祀った際、采女に神殿の田植えをさせたと伝わる。

◇日本武尊にまつわる伝説

- ①「焼津神社」（静岡県焼津市）、日本武尊は土地の国造の陰謀にはまって狩猟中の野原に火を放たれ、焼き殺されそうになった時でも、大火に至らぬようにと天叢雲剣で必死に枯れ草をなぎ払っていたと伝わる。御神体は火石と水石。配神は、日本武尊と吉備武彦命ら重臣。
- ②「日本平（にほんだいら）」（静岡市清水区・駿河区）、日本武尊は、このあたりの小高い丘に登って周りの平原を見渡した。これを見た人々は、この平原を「日本平」と名付けたという。
- ③『常陸国風土記』、「倭武の天皇、東の夷の国に巡狩りて、新治の県に幸過ししに、」「信太郡」、「倭武の天皇、海辺に巡幸して、乗浜に行き至りましき。浜浦の上に多くの海苔を乾せりき。是によりて能里波麻の村と名づく」
- 「多珂郡」、「倭武の天皇、野に幸して、橘の皇后を遣して、海に臨みて漁らしめ、獲物の利を相競わむと、別きて山と海の物を探りたまいき」、
- 「郡の南三十里に、藻島の駅家あり。・倭武の天皇、舟に乗り海に浮びて、島の磯を御覧したまいしに、種々の海藻、多に生い繁れり。因りて名づく」
- ④「熱田神宮」（名古屋市中熱田区）、主祭神は熱田大神。草薙剣（天叢雲剣）をご神体とする。相殿の神は、天照大神、素戔嗚、日本武尊、宮ス姫、宮ス姫の兄・建稲種。建稲種は、日本武尊の北伐の折、副将となつて付き従つた。
- 明治期以降、神宮や明治政府の見解では、熱田大神は草薙剣を依り代とした天照大神とされる。
- ⑤「日高見神社」（宮城県石巻市）、祭神は天照大神、配神は日本武命・竹内宿禰命。日本武尊が陸奥に遠征した折、その偉業を崇敬して創建されたという。

〔鹽竈（しおがま）神社〕（宮城県塩竈市）、神社の始まりは、武甕槌命・経津主神が東北を平定した折、二人を先導した塩土老が土地の人たちに製塩を教えたことに由来するという。祭神は、塩土老翁神、武甕槌命・経津主神。

この物語では、武甕槌命・経津主神の東北平定から六十余年後の二九〇年代後半、北伐に向かった日本武の船団が多賀浜（宮城県）沖あいに到り、松島湾から塩竈湊に入ったと見ている。

⑥〔居醒（いさめ）の清水〕（滋賀県米原市醒ヶ井）、日本武尊が飲んだ清水とされる。

〔鞍懸（くらがけ）石〕（米原市醒ヶ井）、日本武尊が鞍をおいた石という。

〔腰掛石〕（米原市醒ヶ井）、日本武尊が腰をかけた石という。

⑦〔加佐登（かさと）神社〕（三重県鈴鹿市加佐登町）、日本武尊が死の間際まで所持した笠と杖を祀る。

〔尾津前（おづさき）御遺跡〕（三重県桑名市多度町）、日本武尊が出征の途上で、刀を置き忘れた尾津前（尾津浜）の地とされる。北伐からの帰途、この地に立ち寄った彼はその刀を見つけ、

「尾張に 直に向へる 一つ松 あはれ 一つ松 人にありせば 衣著せましを 太刀佩けましを」と詠んだと伝わる。

〔杖衝（つえつき）坂〕（三重県四日市）、日本武尊は杖をつきながらこの急坂を上ったという。

〔日本武尊能褒野（のぼの）御墓〕（三重県亀山市）、全長九〇^{メートル}、後円部の径五四^{メートル}、高さ九^{メートル}で三重北部最大の前方後円墳。北征の帰途、日本武尊が伊勢国能褒野で逝ったとする「記紀」の記述に基づき、「日本武尊能褒野御墓」とされた。近くに、自然豊かな「のぼの森公園」が広がる。